

令和6年度（2024年度）心理アセスメントコース（冬季）



## 【田中ビネー知能検査V】 検査結果の解釈

令和7年（2025年）1月14日（火） 13:00～14:00  
北海道立特別支援教育センター  
教育課主査（知的障がい教育室長）岡 森 博 宣  
研究員（知的障がい教育室）小 幡 史 門

1

北海道立特別支援教育センターの岡森です。

この時間は、先ほど演習で学んでいただいた田中ビネー知能検査Vの結果の処理や解釈について説明します。

# 内容

- 1 結果の処理
- 2 結果の解釈と活用
- 3 まとめ

2

まずはじめに、「結果の処理」について説明します。

ここでは、検査結果の処理の仕方について説明しながら、生活年齢や精神年齢を求める演習を行っていただきます。

2つ目は、「結果の解釈と活用」について説明します。

先ほどの講義でもお伝えしたように、結果をどのように指導につなげるかが学校における心理検査の活用において重要なポイントですので、ここでは、検査結果の読み取りにおいて大切なことと、結果の解釈から指導につなげる際のポイントについて説明します。

よろしく申し上げます。

# 1 結果の処理

3

次に、検査結果の処理について演習を行います。

先生方にも演習を行っていただきながら、処理の流れやポイントを学んでいただきます。

## (1) 知能検査にかかわる用語

### ○ 生活年齢 (CA: Chronological Age)

- ・ 被検査者の実際の暦年齢

### ○ 精神年齢 (MA: Mental Age)

- ・ 知能の水準を年齢で表したもの

### ○ 基底年齢 (Basal Age)

- ・ 被検査者がある年齢級に属する問題を全て合格した場合の一つ上の年齢

### ○ 知能指数 (IQ: Intelligence Quotient)

- ・  $\text{精神年齢} \div \text{生活年齢} \times 100$  の公式で求められる商を小数点第一位で四捨五入した数値で表す尺度

「田中ビネー知能検査Ⅴ採点マニュアル」 (田研出版) P21～24

4

まず、知能検査に関する用語について確認しましょう。

生活年齢は、被検査者の実際の暦年齢のことです。

特に就学の相談で来るような幼児や児童は、同じ5～6歳でも早生まれと遅生まれとではかなりの差が見られる場合があるので、「何歳」だけでなく、「何か月」といった単位で捉えておく必要があります。

次に、精神年齢です。これは説明の必要がないと思いますが、精神年齢は、知能の水準を年齢で表したもののことです。

例えば、生活年齢5歳0か月の子どもと7歳0か月の子どもが、ともに精神水準6歳0か月だった場合、前者は知能の発達が進んでおり、後者は遅れが心配されると理解できます。

基底年齢とは、ある年齢級の問題全てに合格した場合の、その1つ上の年齢のことです。

例えば、5歳級の問題を全て合格した子どもの基底年齢は、(5歳+1)で6歳となります。

基底年齢が、生活年齢をかなり下回った場合、発達の遅れや偏りが心配されます。

次に知能指数についてです。

精神年齢は、子どもの知能水準を示しますが、それ自体は知能の高い低いや遅い速いを示すものではないので、これをもっと明確に示すために考案されたのが精神年齢と生活年齢を比較する、知能指数になります。

知能検査の解釈では、こういった用語を確認しておくことも大切ですので、先生方にこれらの数値を求めていただきたいと考えています。

## (2) 生活年齢の算出法

・生活年齢を算出するには、検査実施の年月日からその子どもの生年月日を引く。

検査月日 2024年10月20日  
生年月日 2018年12月25日

12か月

30日

5年9月25日

1 か月は便宜上30日として数え、日数が30日となった場合は1か月として繰り上げる。30日未満は切り捨てる。

**5歳9か月**

「田中ビネー知能検査Ⅴ採点マニュアル」（田研出版）P28～29

5

まずは、生活年齢の算出方法について説明します。

生活年齢を算出するには、検査実施の年月日から、子どもの生年月日を引きます。

田中ビネー知能検査Ⅴでは、1 か月は30日として数えるので、計算の結果日数が30日となった場合は1か月として繰り上げ、30日未満は切り捨てます。

スライドの例の場合、月も日数も引くことができないので、<クリック>月から30日、年から12カ月を繰り下げて計算します。

こちらの例では、算出の結果<クリック>5年9月25日となりました。30日以下は切り捨てとなりますので、こちらの生活年齢は<クリック>5歳9か月となります。

それでは、生活年齢を算出する演習を行いますので、お手元に演習シートを御用意ください。

まずは、(1) のアとイについて、それぞれ生活年齢を求めてください。

## 演習 結果の処理 (1)ア【回答】

平成36年  
検査月日 ~~令和1年~~ 8月30日  
生年月日 平成30年7月2日  
6年1月28日

6歳1か月

6

【配付しません】

アの回答です。

まず、令和と平成で計算するため<クリック>年号を合わせます。  
(西暦で計算してもよいことを伝える)

月や日にちについては、検査月日からそのまま引くことができるので計算すると、<クリック>6年1月28日となります。

30日未満は切り捨てますので、アの演習の生活年齢は<クリック>6歳1か月となります。

## 演習 結果の処理 (1)イ【回答】

検査月日 ~~平成36年~~ 2月 <sup>35</sup> <sup>12か月</sup> 令和元年9月5日  
生年月日 平成27年10月1日  
8年11月4日

8歳11か月

7

【配付しません】

続いてイの回答です。

こちらも、令和と平成で計算するため<クリック>年号を合わせます。

年や日にちについては、検査月日からそのまま引くことができますが、月は生年月日の方が大きいため、<クリック>年から12カ月を繰り下げて計算します。

答えは<クリック>8年11月4日となり、30日未満は切り捨てますので、イの演習の生活年齢は<クリック>8歳11か月となります。

### (3) 精神年齢の算出

#### ア 精神年齢の算出法

- ① 基底年齢を求める。
- ② 基底年齢を定めた年齢級より上の年齢級で、合格した問題数にそれぞれ与えられた加算月数をかける。
- ③ ①の基底年齢に②の月数合計をプラスし、精神年齢を算出する。

「田中ビネー知能検査Ⅴ採点マニュアル」(田研出版) P29

8

次に、精神年齢の算出です。

田中ビネー知能検査Ⅴは、年齢水準に応じて問題が設定されているので、精神年齢を算出するには、スライドのような手順で行います。

次のスライドで、手順を説明していきますが、その前に②の加算月数について説明します。

## イ 加算月数

1～3歳級	1問につき1か月
4～13歳級	1問につき2か月

「田中ビネー知能検査Ⅴ採点マニュアル」（田研出版）P23

9

ビネーⅤでは、各問題の価値を揃える必要性から、問題の数や難易度を基にして重み付けがなされています。

加算月数は、精神年齢を算出する上で必要となりますが、各年齢級によって1問に与えられる加算月数が異なっていることに留意してください。

1歳～3歳は、一問につき1か月。

4歳～13歳は、一問につき2か月が加算されます。

年齢	問題名	結果	年齢	問題名	結果
1歳級	1 チップ差し★11	×	49 絵の不合理★44	×	
	2 犬さがし	×	50 曜日	×	
	3 身体各部の指示(客体)	×	51 ひし形線写	×	
	4 言葉(物)★14	×	52 理解(問題場面への対応)	×	
	5 積木つみ	×	53 数の比較★58	×	
	6 名称による物の指示★12	×	54 打ち歌え	×	
	7 簡単な指図に従う★19	×	55 前後推測	×	
	8 3種の型の体のこみ	×	56 記号によるひもとおし	×	
	9 用途による物の指示★21	×	57 共通点(A)	×	
	10 言葉(絵)★24, 25, 37	×	58 数の比較★53	×	
	11 チップ差し★1	×	59 漢文字の同じ単語	×	
	12 名称による物の指示★6	×	60 絵の不合理(A)	×	
2歳級	13 動物の見分け	×	61 短文の復唱(B)	×	
	14 言葉(物)★4	×	62 精明の並べ換え(A)	×	
	15 大きさの比較	×	63 数的思考(A)	×	
	16 2語文の復唱	×	64 短文作り	×	
	17 色分け	×	65 垂直と水平の推測	×	
	18 身体各部の指示(主体)	×	66 共通点(B)	×	
	19 簡単な指図に従う★7	×	67 絵の解釈(A)	×	
	20 線の線を引く	×	68 数的思考(B)	×	
	21 用途による物の指示★9	×	69 差異点と共通点	×	
	22 トンネル作り	×	70 図形の記憶(A)	×	
	23 色の組み合わせ	×	71 絵の不合理(B)	×	
	24 言葉(絵)★10, 25, 37	×	72 単語の列挙	×	
3歳級	25 言葉(絵)★10, 24, 37	×	73 絵の解釈(B)	×	
	26 小鳥の線の完成	×	74 絵の記憶(A)	×	
	27 短文の復唱(A)	×	75 ボールさがし	×	
	28 属性による物の指示	×	76 数的思考(C)	×	
	29 位置の記憶	×	77 文の完成	×	
	30 数概念(2個)	×	78 積木の数(A)	×	
	31 物の定義	×	79 語の意味★85	×	
	32 絵の異同弁別	×	80 形と位置の推測★90	×	
	33 理解(基本的生活習慣)	×	81 絵の記憶(B)	×	
	34 円を描く	×	82 数的思考(D)	×	
	35 反対稱性(A)	×	83 木曜・入場をつく漢字	×	
	36 数概念(3個)	×	84 絵の不合理(C)	×	
4歳級	37 言葉(絵)★10, 24, 25	×	85 語の意味★79	×	
	38 順序の記憶	×	86 分類	×	
	39 理解(身体機能)	×	87 数的思考(E)	×	
	40 数概念(1対1の対応)	×	88 図形の記憶(B)	×	
	41 長方形の組み合わせ	×	89 精明の並べ換え(B)	×	
	42 反対稱性(B)	×	90 形と位置の推測★80	×	
	43 数概念(10個まで)	×	91 共通点(C)	×	
	44 絵の不合理★49	×	92 暗号	×	
	45 三角形線写	×	93 方角	×	
	46 絵の欠所発見	×	94 積木の数(B)	×	
	47 横並びによるひもとおし	×	95 絵の不合理(D)	×	
	48 左右の弁別	×	96 三段論法	×	

### ①基底年齢

$$2歳 + 1歳 = 3歳$$

### ②加算月数

$$3歳級 = 9問 \times 1か月 = 9か月$$

$$\left. \begin{array}{l} 4歳級 = 2問 \\ 5歳級 = 2問 \end{array} \right\} 4問 \times 2か月 = 8か月$$

$$6歳級 = 0問$$

↓  
17か月

### ③精神年齢

$$3歳 + 17か月 =$$

4歳5か月

「田中ビネー知能検査V採点マニュアル」(田研出版) P32~33 10

スライドは4歳8か月の子どもの記録です。検査用紙は配付できないため、お手元の資料からは消していますが、このスライドを見ながら聞いてください。

まず、基底年齢ですが、この子どもが全問合格しているのは2歳級ですので、2歳+1歳で「3歳」が基底年齢となります。

次に加算月数です。基底年齢より上の年齢級で合格した問題数を数えますが、全部で何問ありますか？数えてみてください。

基底年齢より上の合格は、全部で13問ですが、1~3歳級と4~13歳級までの加算月数は違うので、計算する際に注意が必要です。

スライドの事例では、まず3歳級が9問合格なので、それに1か月を掛けて9か月。4歳と5歳級にそれぞれ2問ずつ合格していますので4問に加算月数の2か月を掛けて8か月となり、合わせると<クリック>17か月となります。

最後に、基底年齢の3歳に17か月をプラスし、12か月を1歳として繰り上げると、精神年齢は<クリック>4歳5か月となります。

それでは、精神年齢を算出する演習を行いますので、お手元に先ほど生活年齢を計算した演習シートを御用意ください。

(2)の①から③について、それぞれ生活年齢を求めてください。

また、生活年齢と、精神年齢からIQも求めていただきます。

## 演習 結果の処理 (2) 【回答】

①**基底年齢**                    3歳（2歳＋1）

②**加算月数**

3歳    9(問) × 1か月 = 9か月

4歳    3(問) × 2か月 = 6か月

~~15か月~~

③**精神年齢**

3歳 + 15か月 → **4歳3か月**

11

【配付しない】

まず、①の基底年齢ですが、全て合格した年齢級が2歳のため、その一つ上の年齢で<クリック>3歳となります。

次に、加算月数です。3歳級で合格した問題が9問でした。3歳級に与えられる加算月数は1か月となるので、9か月となります。

4歳級で合格した問題は3問でした。4歳級以上に与えられる加算月数は2か月となるので、6か月となり、合わせて15か月が加算されます。

基底年齢に加算月数を足すと、3歳15か月となり、15か月は一年繰り上げられますので、<クリック>4歳3か月がこの演習の精神年齢となります。

## 演習 結果の処理 (2) 【回答】

### ④ I Q

$$\frac{4 \text{ 歳 } 3 \text{ か月}}{3 \text{ 歳 } 8 \text{ か月}} \times 100 = \frac{51 \text{ か月}}{44 \text{ か月}} \times 100$$

$$115.9 = \boxed{116}$$

12

【配付しません】

次に I Q の算出です。

I Q は精神年齢を生活年齢で割り、100 を掛けたものを小数点第一位で四捨五入します。

この事例では、生活年齢が 3 歳 8 か月で、精神年齢が先ほど求めた 4 歳 3 か月となりますが、このままでは計算ができないため、月数に換算して計算します。

計算すると 115.9 となり、小数点第一位で四捨五入すると <クリック> 116 となります。

## (4) その他

- 14歳0か月以上の被検査者は、原則として精神年齢を算出せず、下位検査別評価点と領域別D I Q（偏差知能指数）を求める。
- 1歳級の問題においても著しく不合格が目立った場合は「発達チェック」項目を用いて発達状態をチェックする。

「田中ビネー知能検査Ⅴ採点マニュアル」（田研出版）P20～22

13

また、本講義では扱いませんが、14歳以上の被検査者については、原則として精神年齢を求めず、偏差知能指数（結晶性とか流動性というのを昨日確認した）を求めることや、1歳級の問題に不合格があった場合の基底年齢の定め方について、採点マニュアルに詳しく書かれていますので、実施の際は確認してください。

## 2 結果の解釈と活用

14

では、検査結果の解釈と活用について説明します。

## (1) 結果の解釈の基本

- ① 被検査者の反応を検査中の様子も踏まえて詳細に分析・整理する。
- ② 被検査者を取り巻く様々な状況（検査目的、生育歴、家族構成、家族関係、友人関係、学校などの社会との関係）等、情報を収集する。
- ③ ①②を踏まえて必要と判断された場合は、他の検査も実施するなどテストバッテリーを組む。
- ④ ①～③を照らし合わせて多角的な視点で解釈する。
- ⑤ 解釈にそって指導計画を作成する。
- ⑥ 被検査者の年齢やニーズにもよるが、半年か1年後に経過を観察し、検証する。
- ⑦ ⑥を踏まえて新たな指導計画を作成する。

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」（田研出版）P115～116

15

検査結果の解釈の基本です。

結果の解釈は検査によっても様々ですが、ビネーⅤではこのようになっています。

特に②にある、様々な情報の収集。これは、昨日の講義でもお伝えしたように、検査の場面だけがその子のすべてではないということです。日常の様子聞き取りと合わせて検査結果の解釈をすることで、よりその子どもに合った支援につなげることができます。

検査結果を解釈するのは、実施した担当者ということが多いと思いますが、スーパーバイザーに意見を求めたり、ケースカンファレンスを行う中で、検査の結果だけではなくて、他の情報も手掛かりにして、広い視野で捉えることが大切です。

知能検査の結果ですので、解釈は慎重であること、そして、結果だけで決めつけるのではなくて、柔軟で幅のある見立てであることという心構えで行うことが重要です。

具体的には、「IQが100の子どもだ」とか「80の子どもだ」とか、「普通だ」とか「遅れている」みたいにレベル付けや数値付けで終わってしまうと、せっかく長い時間かけて行った結果が生かされないということになってしまいます。

私たちは学校や園などの教育機関として子どもに関わりますので、検査結果を学校生活や日常生活の指導に活かすために、個別の指導計画に反映することも大切です。特別支援教育コーディネーターの皆さんであれば、検査の結果を踏まえて担任の先生に伝えたり、一緒に具体的手立てを考えたりすることもあると思います。

ぜひ、知能検査を行う際には、子どもの成長を促すためのものであるということを心に留めておいていただきたいと思います。

## (2) 測定誤差

田中ビネーVでは、知能検査（IQ）の数値を解釈する場合±8の範囲で捉える。

例えばIQ=108という結果の場合 IQ100～116の間にあると考える。

- ・数値的な手掛かりは、絶対視されやすい。
- ・数値を示す場合は、上記のことを十分に説明する。



- ・観察を重視した報告を行う。
- ・今後の指導方法の提案を行う。
- ・保護者とともに子どもの成長を促すメニューを考案する。

「田中ビネー知能検査V理論マニュアル」（田研出版）P117

16

測定誤差です。例えば、身長ですとか体重みたいに直接測定できるものでも1mmや1gといった誤差が起こることがありますが、どのような測定にも誤差というものは必ずあります。

特に、知能のように間接的にしか測定できない場合は、測定誤差の入り込む余地は大きいと考えます。

熟練の相談担当者がどんなに優れた検査用具で正確に検査を実施したとしても、検査結果は絶対的なものではないということです。

測定できるのは知能そのものではなく、子どもがもつ能力の一部を測定しているにすぎませんので、だからこそ、結果を解釈するときには、この測定誤差を考慮する必要があります。

田中ビネー知能検査Vの場合は、±8の範囲で捉えることとしています。

例えばIQ=108という結果の場合 IQ100～116の間にあると考えられることになります。

特に、保護者などに結果を伝える際、IQのような数値的な手掛かりはとかく絶対視されやすいので特に注意が必要です。当センターでも検査を実施する相談を行います。数値で伝えることはなく、精神年齢などでその日のパフォーマンスとして結果をお伝えしています。

数値も、支援を考える材料として重要ですが、観察（検査中の様子：例えば、道具を操作するのは得意で集中→言語性の検査になると落ち着きがなくなるなど）観察を重視した報告を行い、今後の支援方法について提案したり保護者とともに子どもの成長を促す指導方法を考えたりすることが、知能検査を活かすことにつながります。

## (3) 結果の解釈と活用

### ①検査の目的

知能検査を実施するにはそれ相当の理由や目的がなくてはならない。漠然と検査を実施すれば、被検査者の利益につながらなかったり、長時間、被検査者の精神的な負担をかけて実施したことが生かされなかったりする。

### ②検査の取り組みの状況の確認

取組の様子、検査に要した時間や環境、特記すべき内容の確認  
(アセスメントシートへの記入)

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」(田研出版) P118～121

17

ここからは結果の解釈と活用についてお話しします。

検査結果を実際に活用するためには、4つのポイントがあります。

1つ目は【検査の目的】(どんな理由で検査をすることになったか)

知能検査を実施するにはそれ相当の理由や目的がなくてはなりません。漠然と検査を実施すれば、被検査者の利益につながらないばかりか、せっかく長い時間を要し、被検査者の精神的な負担をかけて実施したことが生かされなかったりします。

ことばの遅れが気になる、本人が学習について行けなくて自信をなくしているなど、相談の主訴は様々ですが、小学校高学年の児童や中高生に実施する際には本人の同意が重要であり、とにかく検査をする理由が明確であることが大切です。

2つ目は【検査への取組】(どのような条件で検査が実施されたか)

子どもがどのようなコンディションで検査を受けたのかについて、検査場面での情報を得ておくことが大切です。

これは、検査結果が本当に子どもの能力を反映していると信頼できて、初めて診断や解釈もまた確かなものになるからです。(→自分の相談の例で紹介。～「いつもはお昼寝の時間なんです…」、反対に「集中力が課題で…」と母は言うけれど、集中してやる子)

### ③検査結果の解釈

精神年齢や知能指数などの数値が示すその意味を考えたり、被検査者の反応内容を分析して、支援のための様々な仮説を立てる。

### ④今後の指導法

どのような支援があれば、被検査者の利益につながるかを考える。

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」（田研出版）P125～133

18

3つ目は【検査結果の解釈】（得られた検査結果から何が分かるか）

子どもがもてる力を十分に発揮したうえでの検査結果が得られたとして、次に行うことは、精神年齢や知能指数などの数値が示すその意味を考えたり、子どもの反応内容を分析して、支援のための様々な仮説を立てることです。

個々の留意点については、次のスライドで説明します。

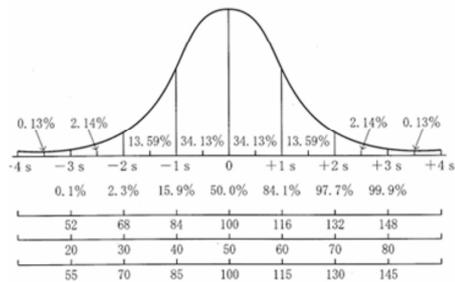
4つ目は【今後の指導法】（どんな指導をすれば子どもの利益につながるか）こういったことが検査を通じて明らかになっていることが大切です。

取組の様子や反応、検査にかかる時間、特記すべき行動などは、検査結果を分析したり、仮説を立てる際に重要な情報となるので、検査用具や手続きが多くて大変ですが、様子を記録しておくことが子どもの指導につなげる上で大切になってきます。

## 知能指数(IQ)、精神年齢(MA)の読み取り

例えば...

生活年齢 5歳10か月  
精神年齢 4歳1か月



- 知能は直接的に測定することは不可能なので、課題を与えてそれに対する反応や行動を手掛かりに判断することから、幅をもって柔軟に解釈することが大切
- この結果がどのような意味を持つのかについてさらに検証する必要がある。

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」(田研出版) P125~130

19

次に検査内容の分析です。ここでは、知能指数や精神年齢などの各数値が示す意味を考えたり、子どもの反応を分析したりして、指導のための様々な仮説を立てます。

まず、数値的な情報の分析です。

例えば、生活年齢が5歳10か月で、ビネーの結果精神年齢が4歳1か月だった場合、知能指数はIQ70となります。

この結果を数値で見た場合、皆さんはこの子の状態像としてどのようなことを考えますか？

(受講者は少し考える)

IQ70ですから、正規分布のグラフで見ると2段階下のレベルとなりますので、知的発達に遅れがあるのではないかと考えた方も多いと思います。

しかしながら、子どもが十分に検査に取り組めなかった場合など、取組の状況によっては、70という数値のみでは判断できない場合もあるかもしれません。

知能指数や精神年齢などが示す数値は分かりやすい指標ですが、反面、誤解を受けやすい指標でもあります。

繰り返しになりますが、知能は直接的に測定することは不可能なので、課題を与えてそれに対する反応や行動を手掛かりに判断することなので、幅をもって柔軟に解釈することが大切になります。

## 基底年齢と上限年齢、実施年齢級の範囲

2歳級		3歳級		4歳級		5歳級		6歳級	
13	○	25	×	37	×	43	×	49	×
14	○	26	×	38	×	44	×	50	×
15	○	27	×	39	×	45	×	51	×
16	○	28	○	40	○	46	×	52	×
17	○	29	×	41	×	47	○	53	×
18	○	30	○	42	×	48	○	54	×
19	○	31	○	<b>生活年齢 5歳10か月</b> ・基底年齢 3歳 ・上限年齢 6歳 ・2歳級～6歳級まで実施 ・所要時間 1時間2分					
20	○	32	×						
21	○	33	○						
22	○	34	○						
23	○	35	○						
24	○	36	○						

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」（田研出版）P125～130

20

基底年齢と上限年齢、実施年齢級の範囲からの分析です。

先ほどの生活年齢が5歳10か月の子どもは、スライドのように2歳級から6歳級まで実施しました。

この子どもの場合、全て正答しているのが2歳級であることから基底年齢は3歳となります。実施した年齢級の範囲は、5歳児として特に目立つものではありませんが、基底年齢が生活年齢よりも大きく低い場合には、発達の遅れが心配されるケースもあります。

まずは全体的な実施の範囲や所要時間を分析します。

例えば、実施した範囲が非常に広ければ発達障がいの子どものように各能力に偏り（得意不得意のアンバランスがある）があるかもしれませんが、逆に、実施した範囲が非常にコンパクトであれば、各能力の偏りも少ないと推定されます。

また、生活年齢より基底年齢が低いということは、同年齢集団の中で期待される平均的な発達に追いついていないことを意味します。

ただし、各年齢級の合格・不合格の割合がどうであるかによっても基底年齢の低さの意味は異なります。

例えば、記憶の問題だけが合格できずに、どんどん年齢級を下げた場合などは子どもの能力の偏りが基底年齢を下げたと推定することができます。

反対に、各年齢級のどの問題も不合格が多い場合は、基底年齢の低さは全体的な知的能力の未発達と分析することができます。

子どもが楽々と通過できた年齢級は何歳か、どの年齢級から不合格が目立っているかを見ることが大切で、その上で、どの問題に合格し、あるいは不合格となったかに着目します

この子どもの場合、3歳級は12問中7問の合格であり、生活年齢より下の3歳児が挑戦する課題で半分近く取りこぼしていることが分かります。

4歳級では1問、5歳級では2問の合格であることから、生活年齢の5歳級では難しいが、3歳級の問題であれば実力を出すことができると読み取ることができます。

## 各問題に対する反応分析

例えば...

### 3歳級の誤答

- ・語彙(絵)
- ・小鳥の絵の完成
- ・短文の復唱(A)
- ・位置の記憶
- ・絵の異同弁別

### 4歳級の誤答

- ・語彙(絵)
- ・順序の記憶
- ・理解(身体機能)
- ・長方形の組合せ
- ・反対類推

認知や記憶に関わる  
能力が未発達なので  
はないか？



- ・ 知能検査の結果を解釈するときは、「ことばで表現された」手がかりのみならず「態度」や「表情」などノンバーバルな面からもうかがい知れる子どもの姿を把握しておくことが重要である。

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」(田研出版) P125～130

21

次に各問題に対する反応分析を行います。

例えば、先ほどの5歳10か月の子どもの検査結果を見ると、3歳級で不合格だった問題は「語彙」、「小鳥の絵の完成」、「短文の復唱」、「位置の記憶」、「絵の異同弁別」の5問でした。

(各検査内容について概要を説明する)

これらの問題は、「短文の復唱」以外は、絵を認知しなくてはならない点で共通しています。また、記憶に関わる「短文の復唱」と「位置の記憶」の2問ともが不合格である点も注目すべき点です。

4歳級では「語彙」、「順序の記憶」、「理解(身体機能)」、「長方形の組合せ」、「反対類推」が不合格でした。

ここでも、認知に関わる課題と記憶問題が苦手であることが読み取れます。

また、「理解(身体機能)」や「反対類推」は、問題解決能力や抽象的な思考が求められる問題であり、本幼児にはハードルが高い課題であったと考えられます。

(アニメーションを表示)

これらのことから、本幼児は認知や記憶に関わる能力が未発達なのではないかとの仮説が立てられます。

### 順序の記憶...

「1番目も2番目も『犬』と言う。」

「ミニチュアの犬にだけ関心を示して他の物には注意が向かない。」

### 短文の復唱...

「助詞の間違い。文末の言い間違いが見られた。」

「問題の内容に反応し、自分の興味のあることを話し出す。」

### 絵の欠所発見...

「小問①の時に②の欠所を示したり、②の時に④を示すなどちぐはぐな回答を繰り返していた。」

### その他...

「自信の無いときにテストに『こう?』と確かめたり、顔色を見て不安げにしたりしていた。」

注意の転動性が推察される  
目的性の未発達が疑われる  
依存傾向が見られる



「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」 (田研出版) P125～130

22

また、検査に対する反応の特徴を分析し、その子どもの思考様式やパーソナリティの特性をアセスメントしておくことも重要です。

例えば、先ほどの子どもは、「順序の記憶」では、ミニチュアの犬にだけ関心を示して他の物には注意が向かず、2回の問に対し、1番目も2番目も『犬』と言う様子が見られました。

また、「短文の復唱」では、「魚が泳いでいます」が「魚『は』泳いでいます。」や「お母さんが洗濯しています」が「洗濯します」と言い間違えるなど、実に惜しい誤りがありました。

さらに、検査者の問いの後に「公園にお魚いたんだよ！大きいの…あのね～」と思いついたことを話しかける様子が見られています。

「絵の欠所発見」では、小問①の時に②の欠所を示したり、②の時に④を示すなどちぐはぐな回答を繰り返していたことも大きな特徴です。

これらのことから注意の転動性が推察されるとともに、ビネー法の知能の概念である「目的性」の未発達が疑われます。

その他にも、本幼児は自信の無いときに、テストに『こう?』と確かめたり、顔色を見て不安げにしたりしていたことから、困ると他人に頼ろうとする傾向もあるのではないかと分析します。

このように、知能検査の結果を解釈するときは、言葉で表現された手がかりだけではなく、態度や表情などの面からも子どもの姿を把握しておくことが重要です。

## 各年齢級の下位検査の特徴

1歳	具体物の操作、身の回りに関係する内容					
2歳	認知や記憶、社会性の基礎となる内容 (聴覚・視覚共通)					
3歳						
4歳	37 視覚認知	38 記憶	39 聴覚認知	40 視覚認知	41 視覚認知	42 思考
5歳	43 視覚認知	44 思考	45 視覚認知	46 視覚認知	47 視覚認知	48 聴覚認知
6歳	49 思考	50 聴覚認知	51 視覚認知	52 思考	53 視覚認知	54 記憶

各年齢級の不合格の問題をみることで、どのような内容が苦手なのか推測することができる。(得意な内容も同様に推測できる。)

23

### 【配付しない】

午前の講義でお伝えしたように、各年齢級の下位検査には、この表にあるような特徴があります。

それぞれの下位検査の特徴をしっかりと把握することで、教育的な助言につながる子どもの様子について把握することができます。

7歳	55 思考	56 記憶	57 思考	58 思考	59 思考	60 思考
8歳	61 記憶	62 思考	63 記憶	64 思考	65 思考	66 思考
9歳	67 思考	68 思考	69 思考	70 記憶	71 思考	72 思考
10歳	73	74	75	76	77	78
11歳	複雑な思考や記憶に関する内容					
12歳						
13歳	認知	思考	運動	認知	認知	認知

思考に関しては、話し言葉による説明、視覚的道具による説明など、思考するための手段や方法により、回答できる内容が分かれる場合がある。

24

### 【配付しない】

こちらは、7歳から13歳の下位検査の特徴です。

各検査が何をみとるための内容なのかを把握することは、子どもの特徴をとらえたり支援の手がかりを考えるうえで参考になります。

## 誤答分析

- (a) コンピテンスがあり、パフォーマンスも成功（正答）
- (b) コンピテンスがなく、パフォーマンスも失敗（誤答）
- (c) コンピテンスはあるのに、パフォーマンスで失敗（誤答）
- (d) コンピテンスがないのに、パフォーマンスは成功（正答）

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」（田研出版）P130～132

25

子どもの反応を分析する際は、誤答にも注目すると様々なことが読み取れます。  
たとえ、結果は同じ誤答であっても、その意味合いは様々です。  
（4つのパターンについて説明する）

Cのように、能力はあるのに検査で発揮できなかった要因は何か、Dのように普段は難しいことが本番でできた要因は何かを分析すると、支援に役立てることができま

す。  
また、子どもの反応からも、全くでたらめな答え（これは理解できていないなど見取れる）、正答に近い惜しい答え（考え方はあっている、おしい！）、誤りには違いないけれど理解できる内容の答え（〇はあげられないけど、分かる！）では、解釈も違ってきます。

検査の中で、子どもが「分からない」と答えた場合は、これが本当に分からないのか、答えるのが面倒で「分からない」と答えたのかを見極めなくては、知的発達の適切な解釈はできません。時間に制限のある問題での子どもの様子からも具体的な支援方法が考えられます。

### ○ タイムオーバー（T・O）の場合

- ・ 反応・作業は正しくできていて、タイムオーバー
- ・ 反応・作業は失敗で、タイムオーバー
- ・ 検査時間内だが、難しく諦めてしまう

検査場面では正答を示唆するような導き方はしてはいけませんが、日常では子どもにちょっとしたヒントを与えたり、子どもの考えを（そうそうと）支持したり（すごいねと）励ましたりすることで問題解決につながる場合も多いことってないでしょうか。この誤答分析は子どもの支援を考えるとときに、大いに役に立ちます。

## 周辺の情報

解釈や指導方法の方法を考えるに当たっては、被検査者を取り巻く周辺の状況をも視野に入れて行わなければならない。

- 知的発達と環境要因は密接な関係にあること。
- 今後の指導方法についても、周囲の状況と照らして実行可能な方策でなくては効果が期待できない。

「田中ビネー知能検査Ⅴ理論マニュアル」(田研出版) P132

26

子どもの検査結果の解釈や指導方法を考えるうえでは、子どもの周辺の状況をも視野に入れて行わなければなりません。

これは、なぜかという、知的発達と環境要因というのが密接な関係にあることということもそうですが、相談の結果から考えた支援や指導についても、子どもが置かれている環境や状況において実行可能な方策でなくては効果がでないからです。

どんなにすばらしくその子にピッタリな支援でも、実施できる人がいなかったり、専門的すぎて継続が難しかったりするなどの環境では、支援の効果を期待できませんので、周囲の状況も含めて結果を解釈することが大切です。

## (4) 教育相談における活用の仕方

- 保護者に対しては、知的発達の状態を暦年齢との差で説明することもあるが、IQをそのまま伝えることは避け、問題ごとの意味と不合格の問題の特徴を捉えて、例えば、言語や視知覚認知のつまずき等を説明し、家庭での教育について具体的な助言する。
- 知的検査のみで、子どもの障がいや発達の状態を理解することは避け、社会生活能力なども考慮する。さらに、必要に応じて、個人内差を調べるため、他の知能検査とテストバッテリーを組み、総合的に判断するように努める。

27

教育相談での活用においては、今までお伝えしてきた内容を、総合的、分析的に捉えることが重要です。

知能指数や精神年齢が客観的な資料となりますが、私たちは診断をできる立場ではありませんので、例え、発達障がい疑われる場合であっても、数値的な手掛かりだけで判断をしてはいけないというのを大前提としてください。

特に、検査結果として導き出されたIQは、それをそのまま伝えるのではなく、合格・不合格の問題の傾向やそれぞれの反応、検査中に見られた行動面などを手掛かりに、どういった支援が必要か、どのような指導が可能かを考えていくことが大切です。

また、知能検査で得たデータは、たとえどんなに精密に実施された結果であっても、それが固定的で決定的なものではないということを理解しておくことが大切です。

例えば、同年齢の子どもと比べて発達の遅れが疑われる場合、ことばの発達の状態や適応行動の困難さを把握するために、PVT-Rや社会生活能力検査など、複数の検査によるテストバッテリーで、子どもの状態を総合的に捉えるようにします。

## 3 まとめ

28

この時間のまとめです。

- 数値のみで判断せず、幅をもって柔軟に解釈すること。
- 知能検査の結果を解釈するときは、「ことばで表現された」手がかりのみならず「態度」や「表情」などから子どもの姿を把握しておくこと。
- 基底年齢や実施年齢級の範囲、各検査の反応から分析し、具体的な支援につなげること。

29

心理検査によるアセスメントは、子どもの環境をより良くするための手掛かりを得ることができます。検査結果を、子どもの十分な援助につなげることができなければ、アセスメントの目的を果たしていないということになります。

本講義では、田中ビネーの概要を説明しましたが、まずは心理検査を手順どおりに実施し、正しい検査結果を導き出すことが大切です。

また、検査の数値は子どもの全ての能力ではないということを改めて確認します。ビネーの知能観について冒頭で説明しましたが、心理検査から読み取ることができた能力は、個々に独立しているのではなく相互に重なり合い、複雑に絡み合っています。そのことを十分に認識した上で、心理検査を活用し、子どもの能力を発揮できる環境の設定に役立ててほしいと考えます。

検査結果とともに観察、聞き取りから得られた情報を基に総合的に子どものことを理解していくことが大切です。